

りければ、善助、固く辭いなみ奉りて、是れ臣を以て君に敵す、と申す事に候へば、いかに仰せらるとも、この命のみは、奉じかたし、と申上けられども、許し給はず、然らば、是非に及び候はず、とて、俱に場ばに上る、公槍を擧げて、善助に當り給ひければ、善助木刀を持ちてこれを支へ、跳り入つて、公の兩臂ついでを連打に打ち奉り、すなはち頓首して、御臂は痛みも候はざりしかと申上けられば、いやしく、此の如くならでは、技を較ぶとも、益なし、よししく、との給ふ、その事に臨みて、英姿奮發、武將の風あること、此のごとし、善助は、世々劍術の師範を務めし者、既に終りて後、公の槍法は、よのつねにればしまさす、としばしく物語りけるとぞ、

(未完)

## 信 ぎ る 所 と 明 に す

大 野 禱 一

馬關條約一たび成て、漢山の風雲未だ收らず、密雲疊々、雨ふらんと欲きて未だ雨ふらず、赤電時に雲間に閃きて、未だ殷々轟々の聲を聞かず、是正に時窮せんときて英才を思ふの時、我國育英の任に當り、將た人物を以て世を匡濟せんと欲するもの、人材の多うらんを願ふの秋なり、是時に當り常時懷抱する所を明にして以て其人に質す、豈益なからんや。

歐大陸の西北岸頭に位し、ビスケイの灣荒波激濤天を排する處、灣流の洗ふ處、環海千里、纜を繋ぐべきの港、碇を投すべきの灣、沿岸に出入し、萬國の船舶此に輻湊し、萬國の商賈此に集る、其市邑の多き二千有余、其の倉庫の夥しき普く天下の物産を堆積す、其市街の肩摩穀擊晝夜車馬囂々たる、其製造業の繁盛なる、陸には百萬の貔貅を列ね、海には數千の艨艟鐵艦を浮ぶ、其勢宇内を包擧し、其威一

世を睥睨す、嗚呼、これ英國現今の光景にあらざるや。然れども、茫々千有余年の昔、該撒が旗を立て、ドゥバーの白壁を眺めたる時、カエルト製を横へて底莫斯を遡れる時、何ぞ此の蠢々たる蠻族が、此の藁爾たる一小嶋國より起り、かくも一世に雄視するに至らんとを思はんや。大西大平兩洋の間に位し、廣袤萬里、平原茫茫、ミスシッピーの河滔々として其中央を流駛し、ミッソリー、ラハイラ、ブラット、アルカンサスの諸大支流其間に屈折轉流す、土壤平坦、地味豐饒、到る處豐耕牧畜の沃野に富み、鑛山には金銀銅鉄充溢す、人民は新立國の勢を驅りて完全新美の政体を設け、殷富を以て傲然宇内を睥睨す、嗚呼これ北米合衆國の狀態にあらざるや。然れども、今を去ること四百余年の昔、エロンブスが二三の小艦を率ゐて此の土に着し、初めて裸体跣足の蠻族を見たる時、何ぞ後來この矮屋が大夏高樓となり、この部落が世界屈指の市場となり、この蠻土が世界の黃金國たるを知らんや。然れども、更に怪むことを須ひず、是國家發達の大勢なれば也。然るを若し當時野蠻なるの故を以て、兩國後來決して富強文明の國たるを得ずと云ふものあらば、誰か其愚を笑はざらん。

夫、人は學修交際の二つにより、其智識を進め、識徳を高くし、勉めて止まずんば、以て賢に至り聖に至らんこと、猶一國が學術の進歩と交通貿易とによりて、國民の智識を進め、富強の度を高くし、萬國に雄視するに至るがごとし。獨怪む世人は、何が故に、野蠻國が後來一強國となることを認めて、一旦愚鈍なるものゝ、後來大器となるの期あることを許さざるや。何が故に、衰微せる一強國が後來尙は勃興の運あるを認めて、一朝身に瑕瑾あるものゝ、後來金玉たるを得るの期あることを許さざるや。けだし人の資質清濁粹駁の差あること、猶土地に豐饒瘦瘠の別あるがごとしと雖ども、其一點靈妙の精神所謂明德なるものに至りては則一なり。其修養如何によりて、聖に至り賢に至らんこと、猶國民

の勵精如何によりて、國家の隆盛を來すことを得るがごとし。然るに、今日愚鈍の故を以て、他日聖賢たることを得ずと云はゞ、是千余年前の英國を指して、後來強國たることを得ずと云ひ、四百余年前の米國を指して、到底黃金國たることを得ずと云ふに何ぞ異ならん。

夫、人尊ぶ所のものは、資質にあらすして精神にあり、勉學にあらすして立志にあり。靈妙なる心性、氣稟物欲の之を蔽ふことを患へず、之れを掃ふの精神なきを患ふ。混濁の資質、徒らに勉學するなきを患へず、偉大なる目的に向て此を達せんと希ふ一念劈頭の決心なきを患ふ。偉人傑士の業壯大を極むと雖ども、其困る所は丈夫一念の閃動に在るのみ。蘇長公曰。

人固有暴猛獸、而不操兵、而出入於白刃之中、而色不變者、有見虺蜴而却走、聞鐘鼓之聲、而戰慄者、是勇怯之不齊至於此、然閭閻之小民、爭鬪戲笑卒然之間、而或至於殺人、當其發也、其心翻然其色勃然、若不可以已者、雖天下之勇夫、無以過之。

閭閻之小民勇怯尚且然り、況んや學を講じ道を修むるもの、濟世の念胸中に勃發し、翻然たる其心は變じて、確乎たる安心立命の念となり、勃然たる其色は、勇往直進の氣となるものに於てをや、之を要するに、心志の舵一轉にあるなり。其惟一轉なり、以て賢たるべし、以て愚たるべし。まかしてその賢たると、愚たるとは、之れを導くもの、如何と、其人自身の修養如何にあるなり。維新の原動力は一の松下村塾にあり。松蔭嘗て其子弟に告げて曰く。村塾小なりと雖ども、願くば天下の骨髓とならん。而して其後、維新の大業を起企せるものは、果して當時村塾の少年なり。感化の及ばず所夫此くの如し。然るに、世人動もすれば、人才の求むべきを知りて、之れを養成することを知らず、人才の希なるを嘆じて、振作を圖らず、資質を信じて、修養を重せず、徒らに奇才の名に眩して、空しく後來英傑たるべ

き人をして、廢物たらしむ。是後來英傑一人を滅するにあらずして何ぞ、奪ひ去るにあらずして何ぞ。英傑は國家の盛衰に關するもの、若し夫國家を衰へしむるものを指して、忠ならずと爲すことを得ば、此の人を呼て忠ならずと云ふ、又何の不可か之あらん。若し國家の隆盛を願はざるものを指して、愛國の情なしと爲すことを得ば、此人を指して、愛國の情なしと云ふ、又何の不可か之あらん。范仲淹は廟堂の高きに居ても憂ひ、江湖の卑きに居ても、又憂ふ。余を以て之を見るに、假令資資混濁なるものも、以て國家の材たらしめんと欲する、熱情ある人こそ、眞に國を愛するものと云ふべく、國に忠なるものと云ふべし。徒らに放棄する、之れ道にあらざるなり。嗚呼、今、世に育英の任にあるもの、應に松蔭の至誠と抱負とを以て、子弟の率先者となり、模範となり、之を誘導え、鼓吹し、滅奪の罪を畏れ、敬天の心、以て大に國家に盡さるべけんや。若し此の如くならずして、以て人材の輩出せんことを望む、是木によりて魚をもとむるなり、願ふと雖ども得べけんや。

然ども、古人其の人を責むるや薄く、其の已れを責むるや厚し。世の少年子弟、學を講じ身を修むるものに至ては、之に依頼し、安閑悠々日を送るべきにあらざるなり。古へ豪傑の士は、文王なしと雖ども猶興る、當に以て奮發努力すべきなり。世を舉げて癡となすとも、斷乎として顧みることなかれ。自乘之身を謬るものと、須らく以て志を大ならしむべし。天の人を生ず豈に徒らに生ずるならんや、應に以て爲さしむる職分あるなり。身を憂ひ世を憂ふるは、是確ろに思想一段の識を加へたるの時、此時に乗じて翩然以て賢者の群に入り言行を謹み威儀を正し、以て一世の模範となり、世を濟ひ國を救ふの志を立つべきなり。此の志を立つる徒らに立つるにあらず、天に順ふなり。如此にして、以て國家の富強待つべく、文明期すべし。

然るを、今徒らに小成に安んじ、偷安姑息に流れ、一身を放棄して、以て身をあやまるもの、滔々皆是也。以て責に教にあるものをして、天下才なしの嘆を發せしむ、慨すべきの至ならずや。然ども、之尙忍ぶべし、身を憂ひ世を憂ふの念胸中に閃動するもの、已に克つの勇氣なく、區々たる事物に誘惑され、遂に無用の俗物に終り、或は中道に元氣を損じて、其天真本然を失し、碌々終るに至ては、之れ果して何の心ぞや。夫一國の消長盛衰は、國民中少數なる人物の向背如何にあり、而して今此少數人物を失ふ、將た何を以てか、此の世を濟せん。是余が區々の心を以て、信する所を明にする所以なり。

嗚呼、堂々六尺の大男兒、苟も志なくんば則止む。志あらば、又何のならざることあらんや。爲すもの常に成り、行くもの常に到る、當に發憤努力すべきなり。若夫一たび愛國濟世の念中に動かば、宜しく確乎たる道念と、堅猛なる意志とを把持し、英往直進の氣を養ひ、以て利世安民の業を起企すべきなり。如此は當に我人が盡すべき職分にあらすや。

今や長白山邊黑雲漸く大に、活動の勢萃る所、靈變の機伏する所、迅雷一閃百雷轟き、猛虎一嘯百獸震ふ、活劇の期、將に遠からざらんとす。朝野を擧げて、驚天動地の大才を待つとの聲漸く盛に、英雄一たび去て復かへらず。壓倒海南三尺劍、蹂躪天下七寸鞋、その詩長へに残りて、又其人なし。天の未だ淫雨せざるに當りて、牖戸を稠繆す、法に文に農に工に商に吾人この覺悟あるや否や。

## 武士訓を讀む

### 十八萬空遊士

日清戰爭起りてより、武士道といふこと世の人の口に上ること漸く多くなりたるやうなり。龍南會雜